

る訳注を公刊した。また先の研究成果報告書には、ペルシア語の古典『ターリーヒ・ラシーディー』の一部の校訂テキストと訳注とペルシア語による歴史作品『シャイバーニー・ナーマ』の校訂テキストを収録した。

【他省庁の研究事業との関係】 ない。

研究計画・方法

【役割分担】 間野は 総括および 主としてチャガタイ・トルコ語写本を担当し、真下は主としてペルシア語写本を担当する。

【計画・方法】 1. 現有の資料を補完するため、写本調査を目的とした外国（ロシア、イギリス）及び国内の調査旅行を行う（旅費）。2. 調査した写本の内、重要な写本についてはマイクロフィルムによる収集を行う（消耗品費）。3. 蒐集したマイクロフィルムの内、特に重要なものの焼き付けを行う（その他）。4. 現存のコンピュータを活用するほか、本研究専用コンピュータ1台を購入し（設備品費）、アラビア文字を扱える専門家に写本のテキストデータの入力を行わせる（謝金）。また、アラビア文字の写本研究のためにコンピュータを利用する新たな方法を、専門知識を持つ研究者の助力を得て開発する（謝金）。5. 原典の校訂本など中央アジア史・イスラーム史関係図書の収集を行う（消耗品費）。

A02 六朝期の著作における伝統の継承と変容

研究代表者 興膳 宏
京都大学大学院文学研究科 教授

研究目的

六朝期の学術文化は、古代以来の典籍の系統づけの成立、自覚的な文学創作意識の誕生、文学・書画理論の展開と異分野間の相互交渉という顕著な現象を有する点で、中国古典文化の流れにおいて、きわめて重要な位置を占める。本研究は、これらの諸現象相互を連関・統合させながら研究を加えることで、六朝学術文化の全体像を提示しようとするものである。

具体的には、1) 梁元帝『金楼子』の研究、2) 文学批評用語の研究、3) 六朝伝記資料の研究の三つの柱を立てて、所期の目的を達する計画である。

研究計画・方法

1) 『金楼子』は、本文校訂を行なう。国内資料では校勘に不足する事態も考えられるので、必要に応じ、中国の所蔵機関で調査を行なう。

2) 文学批評用語の研究は、データベースを作成する。

適宜研究補助を雇い、作業の効率化を図る。

3) 伝記資料の研究は、六朝典籍の著者として重要な人物をピックアップし、資料の整理と訳注の作成に着手する。研究協力者の協力を全面的に仰ぎ、謝金・旅費などは多めに配分する。

全体の作業を通じて、コンピュータによるデータ処理を積極的に活用する。

A02 インド哲学における聖典観の展開

本文批評の方法論的反省を踏まえて

研究代表者 丸井 浩
東京大学大学院人文社会系研究科 助教授

研究分担者 金沢 篤
駒沢大学仏教学部 助教授

研究目的

(1) インド哲学における聖典観の展開を、厳密な文献研究を通して解明することによって、インド思想における哲学と宗教の融和・交錯関係の側面を浮かび上げることが目的である。

(2) これまで古典研究の各分野で個別的に蓄積された研究手法を、分野横断的に再検討することによって、より客観的な本文批評の方法論構築を指向した文献研究である。この点に本研究の独自性がある。

(3) 平成9年度基盤研究(B)「古典研究の再構築」開始以後、諸分野の古典研究者が参集し討議を重ねて、再構築の基本構想、基本方針、組織体制が構築され、ニューズレター第1号(1998年10月)として発行された。そこに示された全体構想を踏まえてインド哲学研究の伝統を捉えなおし、より広い視野からインド古典研究の方法論と意義を模索するという方向性を持った計画研究である。

(4) 研究代表者は、平成9-10年度科学研究費補助金基盤研究(C)2「インド論理学派思想史解明」(課題番号 09610019)を推進中であるが、これは本計画研究の重要な基礎を成すことになる。

研究計画・方法

(1) 古典インド哲学体系の完成期に相当する10世紀前後に活躍した哲学者(ジャヤンタとヴァーチャスパティ・ミシュラが中心)の作品を精密に解釈・分析した上で、正統インド哲学諸派におけるヴェーダ聖典観の展開を、文献実証的に明らかにする計画である。

(2) そのうちで平成11年度は、設備品設置等による研究環境の整備と、写本調査、資料・情報収集を推進し、そのための海外旅費(インド、ヨーロッパ)も計上し

である。またテキスト・データベースの作成・整備にある程度の研究補助を求める。月1-2回の定期的な研究会を開いて、研究分担者と緊密な共同研究を展開するほか、調整班A02においてなされる分野横断的な原典研究の方法論的討議との連携を絶えず図ることにしている。(3)研究代表者は、計画研究全体の統括、調整班との連携にあたり、文献解読は『ニヤヤー・マンジャリー』を中心にする。研究分担者は、テキスト・データベースの整備・活用の組織的推進と、ヴァーチャスパティ・ミシュラの関連資料の分析を中心とする。

A02 旧約聖書の本文批評と解釈

その方法論的反省から翻訳の実例まで

研究代表者 関根 清三
東京大学大学院人文社会系研究科 教授

研究目的

本研究の目的と意義は主として、(1)古典のテキストの読解に際し、本文批評に出発し、文学批評、編集史、様式史、等々の理論と技法について総合的反省をすること、(2)歴史的解釈学の歴史的意味規定の課題と、哲学的解釈学の思想的意味規定の課題の、望ましいバランスについての理論を、諸分野との共同研究の中で模索し、旧約解釈の場合に実際に適用すること、(3)そうした解釈学的な吟味を踏まえて更には、端的な意味規定としての翻訳に際して、訳語の統一、文脈での訳語の揺れの検討、過去の諸訳例との比較などを、コンピューターを駆使して遂行しつつ、具体的な翻訳の方法論と実践例を呈示すること、以上3点である。従来(1)についてはドイツの聖書学者の優れた研究があり、私のドイツ語の最初の著作(Die Tritojesajanische Sammlung redaktionsgeschichtlich untersucht. de Gruyter, 1989.)も、特に編集史の理論と応用の典例である。しかし個々の技法相互の関連について総合的に整理することと、他の古典学との情報交換の中で新しい知見を開くことは、本研究の新しい試みとなる。(2)(3)については、旧約預言書の『エレミヤ書』その他について、歴史的批判的な意味の確定と哲学的な解釈の、均衡の取れた訳注を産み出したい。私は既に『イザヤ書訳注』(岩波書店, 1997年)で、この方向の研究成果を公にしているが、当時はまだコンピューターを駆使することが出来ず、訳語の選択や統一についても恣意的な箇所が残った。今回、平成10年度総括班の報告書に書いたような展望も踏まえ、コンピューターの専門家達を研究補助者として諸訳との比

較検討も遂行しつつ、本文批評と解釈の理論の総合的な実践例を呈示したい。

研究計画・方法

本研究の1つの特徴は、コンピューターを駆使する点にあるが、コンピューター本体は、大学の研究室の現有設備として既に備えてあるので、むしろヘブライ語の写本などの各種CD-ROM, それを効率的に動かすための拡張機器等に当面支出する予定である。ヘブライ語の知識とコンピューター・プログラミングの知識を兼ね備えた研究補助者たちに、翻訳のためのデータベース作りと基本操作の開発、また多面的な訳語の統一、従来の訳語の一覧、写本の異読や古代語訳の読み替えなどのチェックをお願いしたく、また原稿の整理、口述、資料収集整理、研究者との連絡などを組織的に行なう助手を置いて仕事の効率化をはかりたく、謝金に比較的多くを計上している。また内外の諸領域の研究者との共同研究の中で新しい知見と刺激を得ることが、本研究の重要な目的の1つであるから、この機会に積極的に内外の研究ネットワークを構築できればと考えている。将来は、なるべくEmailやファックス、郵便等を活用したいが、ネットワークが軌道に乗るまでは、私自身各研究機関を訪れて、交流の基礎を築く必要がある。また私の研究領域では欧米の研究の蓄積と水準が他を凌駕しており、毎年定期的に欧米の大学に資料収集、学术交流の出張をすることが必須である。国内外の旅費を多めに算定しているのは、そのためである。

A02 初期キリスト教におけるイエス伝承の変容史的的研究

研究代表者 佐藤 研
立教大学コミュニティ福祉学部 教授

研究目的

1. 当該研究の目的: この研究の目的は、初期キリスト教におけるイエス伝承のテキスト形態の変容を史的に跡づけると共に、その変容の解釈論的力学を解明することにある。同時に、そのテキスト変容の過程を新約聖書学の研究者および一般的関心層に容易に確認できる形態で公表し、福音書テキストへの総体的関心をこれまでの枠を越える程度にまで拡大することを目標とする。

2. 当該分野における本研究計画の特色・独創的な点・予想される結果と意義:

(1) 紀元1-2世紀におけるイエス伝承の変容過程の通時的・総合的な考察を特長とする。即ち、福音書が成

立する以前の段階から、福音書成立期、および福音書成立以後の時代におけるイエス伝承テキストの総体を一貫して対象とする。

(2) 福音書の斬新な日本語訳テキストを提供する。訳の方針は、教会における使用よりも、学問的正確さを第一義とする。

(3) コンピューターによる、福音書の「共観表」(synopsis)を彩色法を活用して作成する。その際、原語のギリシャ語版と新訳による日本語版の双方の共観表を作り、その中に、(1)の基本線が容易に見て取れるように構成する。

(4) 本特定領域研究の特長を最大に生かし、世界の他の古典伝承分野との比較研究がなされる。

3. 国内外の関連研究の中での位置づけ：上記2.の(1)と(4)は外にも類似の研究はあるが、当該研究はその浩瀚さにオリジナルなものがある。(2)と(3)は新しく、特に(3)は国内外の関連研究の展開にも大きく寄与することが期待される。

4. 準備状況：申請者は、平成7-8年に自らが訳した「共観福音書」(マタイ、マルコ、ルカ)の大規模な改訂作業に着手していると同時に、まだ訳出していない「ヨハネ福音書」の翻訳を開始している。

研究計画・方法

(1) まず、自らの共観福音書翻訳(業績表参照)の改訂作業を終結させ、同時に「ヨハネ福音書」の新訳を完成する。

(2) 「福音書共観表」の作成作業に取りかかる。これはかなりの機械的作業を内包するので、必要な補助力を謝金で獲得する。また、申請者が既に購入したコンピューター以外に、もう一台補助力用のコンピューターと、四福音書テキストを同時表示するための21インチ型モニターその他の備品の導入が必須となる。作業手順は

(a) 標準的ギリシャ語共観書(K. Aland, Synopsis Quattuor Evangeliorum)中の福音書テキストを比較検討し、その幾層かの共通語句を色で染め分ける。これにより福音書間の依存関係が視覚的な明瞭さで識別される。

(b) このギリシャ語の色分けされた共観表に、使徒教父文書・新約外典・教父文書、そしてグノーシス派の「トマス福音書」(但しそのギリシャ語訳)の並行記事を付加して相互検討し、その並行性を再び色で識別可能にする。

(c) 上記(a)(b)の成果をそのまま、コンピューターに入力する。

(d) 上記(1)の新訳を基に、ギリシャ語共観表に対応する日本語共観表を、同じくコンピューター上に作成する。

(3) 上記(2)の方法論に近い形で同種の作業をしている可能性のある海外の研究体制(ドイツ・ミュンスタ大学その他)を視察し、意見交換を行ない、必要に応じて資料提供を謝金でお願いする。

(4) これまでの新約聖書学におけるイエス伝承研究の全体を総括する視座を獲得するため、新約学・初期キリスト教学分野における研究書を組織的に調達し、それらとの対話を開始する。ここでは、これまでの伝統的な「伝承史的・編集史的方法」を徹底させながら、それを超える視点が探索される。

A03 古典学のための情報処理

研究代表者 安永 尚志
国文学研究資料館研究情報部 教授

研究分担者 松村 雄二
国文学研究資料館研究情報部 教授

武井 協三
国文学研究資料館研究情報部 助教授

中村 康夫
国文学研究資料館研究情報部 助教授

山田 哲好
国文学研究資料館史料館 助教授

近藤 泰弘
青山学院大学文学部 教授

アンドル・アーマー
慶応義塾大学文学部 助教授

相田 満
国文学研究資料館研究情報部 助手

原 正一郎
国文学研究資料館研究情報部 助教授

柴山 守
大阪市立大学学術情報総合センター 教授

石塚 英弘
図書館情報大学図書館情報学部 教授

山田 奨治
国際日本文化研究センター 研究部 助教授

研究目的

1. 研究目的：

本研究は古典の読解における諸作業の技法の確立を目的とする。「情報処理」計画研究班では、1) 古典学におけるコンピューター利用の現状把握、2) 標準的な電子化テキストの作成、3) テキストデータベースの流通、4) 基本的なテキスト解析と処理システム、という4つの究課題を設け、実証的な研究を実施する。

2. 特色・独創性、結果と意義：

本研究の特色は、古典学の全面的な再構築を行う手段